

保育所における職員の協働性と 資質向上に関する研究

— 乳児保育における食育の推進をととして —

高橋 美保¹・福島 雅子²
中野 綾子²・早坂 美保²

1. 研究の概要

1) さいたま市の食育目標

食育とは、食育基本法において生きる上での基本であり知育、徳育、体育の基礎となるものと位置付けられている⁽¹⁾。さいたま市では具体的に食育計画を推進するにあたり、「5つの『食べる』」を食育目標として掲げている。さらに、市民一人ひとりが自分にあった食育を取り入れやすいように、ライフステージを6段階に分け、「5つの『食べる』」に関連した各ライフステージの目標を定め、食育の推進に取り組んでいる。

図1にさいたま市「5つの食べる」を示した。

乳幼児期は「食べる意欲・楽しさを育てる」を目標として、「5つの『食べる』」に関連した姿を目指し、食育の推進に取り組んでいる。この目標を達成するためには、成長段階にそった育ちを支援していく保育者の姿勢が問われ、乳幼児への適切な支援の時期や方法の見極め、個々に合わせた進め方の能力が求められる⁽²⁾。

¹白鷗大学教育学部

²さいたま市役所保育課

さいたま市「5つの『食べる』」と乳幼児期に目指す姿

③ 「三食しっかり」食べる

- ・早寝早起きや歯磨きなど、食事のリズムや生活習慣の基礎を身に付ける
- ・十分遊び、お腹が空いて食べるリズムを覚える
- ・噛むことや飲み込む力を身につける

④ 「いっしょに楽しく」食べる

- ・家族や仲間と一緒に食べることを楽しむ
- ・自ら食べ、食器や箸を使う意欲をもち、食を楽しむ

⑤ 「確かな目をもって」食べる

- ・安全で栄養バランスのとれた食事を食べることができる

⑥ 「まごころに感謝して」食べる

- ・「いただきます」や「ごちそうさま」のあいさつを身につける

⑦ 「食文化や地の物を伝え合い」食べる

- ・いろいろな素材の味を楽しみ、食べたいものを増やす

図1 さいたま市「5つの食べる」

2) さいたま市公立保育所における食育の推進状況

乳幼児期の食育は、子どもの心身の成長を促し、生涯の健康に大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。乳幼児期は食に関する様々な経験を通して、知識や自らが食物を選択する力を獲得していく段階であり、周囲の大人の適切な支援が重要となる。

「保育所保育指針」においても、「保育所における食育は健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向けその基礎を培うこと」が目標とされ、食育は保育内容の一環として位置付けられている^③。また、食育を推進するにあたり、職員は保育者として適切な発達支援を実施していく資質と専門性を高め、発達支援のために、職員間の共通理解を深めることが求められている。

特に離乳食においては、職員個人の専門性や職員間で共通理解を持つだ

けでなく、家庭と連携し推進することが求められている。離乳食を進めるにあたって核となるのは家庭である。保育所では、乳児が初めて食べる食材は、家庭で試してから提供するなど、保護者との連携が特に重要事項となっている。

しかし、「仕事との両立で食事作りに時間をかけることが難しい」、「乳幼児向けの食事（特に離乳食）の作り方が分からない」、「離乳食作りが面倒」といった相談を、保育士に持ちかける保護者や家族が多く、子育ての相談をする人が身近にいない、多忙で子育ての悩みを共有する機会が少ない、など特に子どもの食事に対応することが困難な保護者が増えている。

このことから、職員の協働性と資質向上に加え、乳幼児の発達支援だけでなく、保護者支援の観点からも本研究に取り組むことにした。

3) さいたま市「離乳食マニュアル」作成の経緯

「離乳食マニュアル⁽⁴⁾」とは、保育者間で共通理解を持って離乳食が進められるように、平成18年に作成した。その後、「授乳・離乳の支援ガイド」（厚労省）⁽⁵⁾に基づき改訂を重ね、現在は平成24年9月に改訂したものをを用いている。特に、子どもの育ちを観察し、家族の状況などの背景を知り、個々に対応するという基本姿勢を重視したものである。

平成24年9月の改正の際、子どもの発達を見極める客観的な指標とする「保育者チェックシート（以下、チェックシート）」（図2 保育者チェックシート）を新たに取り入れ、写真や図（図3 離乳食マニュアル）による解説を追加した。

チェックシートや写真・図の活用によって、子どもの成長にそった適切な支援を相互に確認し合うことができ、職員間での共通意識を持つことが可能となった。また、職員間での活用だけでなく、保護者対応の媒体として活用できる内容となっている。

子どもの姿を確認しながら進めましょう ～7から8か月ごろ～		
子どもの様子	下の前歯が生えてくる。	
	膝はいて坐して手の平でつかもとする。	
	おすわりが安定してくる。	
	おもちゃ等を上欄りから、手や口で動かすことが出来るようになる。	
	前後と後ろの4本、または本の指でボールなどをつかまえるようになる。	
	片手で持ったおもちゃをもう一方の手に持ち替えることができるようになる。	
	食べものの味や匂い、温度に対する好みが出始める。	
	食べものを人れた時、音を聞いて泣きと嘔てつぶし、飲み込むことが出来る。	
	離乳はやわらかく煮てあればつぶさなくても食べられる。	
	食べものをつぶすたびに左右の口角が伸び縮みし、閉口時は一次字になる。	
保育者の確認事項		
7か月から8か月の発達シート		
発達 評価 項目	はい	いいえ
食べ させ 方		

図2 保育者チェックシート

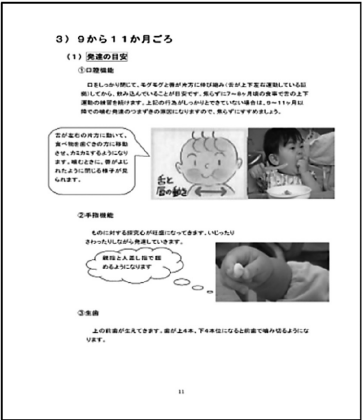


図3 離乳食マニュアル

2. 研究の目的

保育所で食育を進めていくには、保育者の技術だけではなく、家庭との連携も含めた職員の資質や専門性が求められることは言うまでもない。具体的には、乳幼児の心身の発達段階に合わせた離乳の進め方、その確認方法、職員間の共通理解や保育活動の振り返り方法、保護者への支援体制づくりやその能力などである。

「離乳食マニュアル」を媒体に、平成25年度に3回の研修会「離乳食マニュアルの活用について」を開催した。この研修をとおして、職員の協働性と資質向上がどのように図られたか、また保護者支援へどのように繋がっていったのかを把握することを目的とした。

3. 職員の協働性と資質向上に向けた取り組み

1) 研究の方法

(1) 対象

平成25年度に3回の研修会を開催し、その結果を事例研究の対象とした。参加した公立保育所61箇所の0歳児クラス担当保育士または看護師、0歳児がいない保育所は1歳児クラスの担任保育士とし、3回の出席者を対象者とした。

第1回「離乳食マニュアルの活用について」研修会開始前の4月、公立保育所61箇所を対象とした事前アンケート調査を行った。その内容は、各保育所での離乳食マニュアルの活用方法についてである。

(2) 時期と研修内容

第1回研修会は6月11日に開催した。参加者をA～Jの10グループに分け1グループ6人程度とし、各グループで事前アンケート調査結果をもとにマニュアルの活用について討議し、その結果をもとに検討を加えた。

第2回研修会は10月29日に開催し、保育所での活用事例発表と外部講師の講義を受けた。今までの活動の振り返り指標とし、自園での活動内容を自己点検し評価した。

第3回研修会は12月9日に開催し、参加者による事例発表と第1回目と同グループで討議し、他園での取り組み内容やその結果などを情報交換し合い、さいたま市全体的の取り組みとして振り返りを行い活動を総括した。

各回の事例は、研修会での発表内容と事後アンケートをもとに検討を加えたものである。

2) アンケート調査

(1) 方法

平成26年4月に保育所61箇所を対象に、自由記述式の前アンケートを配布し、回答は研修参加者とした。回収率は100%であった。得られた結果

から職員の協働性、職員の資質向上、保護者への支援をカテゴリー化して考察を加えた。

質問項目を以下に示した。

- ① 「離乳食マニュアル」を職員間（保育士と調理員等）で、どのように活用しているか。
- ② 子ども一人一人の発達と離乳食の進め方について、どのように確認し合い状況把握しているか。
- ③ 月齢ごとのチェックシート「子どもの姿を確認しながら進めましょう」「保育者の確認事項」を、どのように活用しているか。
- ④ 「離乳食マニュアル」を活用して、どのような保護者支援をしているか。
- ⑤ 移行期の見極めを、どのようにしているか。

(2) 結果

① 職員の協働性

改訂された「離乳食マニュアル」は、0歳児の在園保育所では園長、副園長、0歳児担任保育士、調理員で読み合わせし、殆どの園が内容を確認していた。特に月齢ごとのチェックシート「子どもの姿を確認しながら進めましょう」「保育者の確認事項」は、子ども一人一部ずつ個別に作成し、担任間で確認し合い、記入しながら離乳食を進めていた園が多かった。

また、調理員は保育士から子どもが食べている様子の報告をうけ、調理形態を工夫し、実際に食べている様子を確認しながら調理を進めていた。

しかし、0歳児がいない保育所では、マニュアルを活用していない園もあった。

② 職員の資質向上

同月齢でも個人差があるため、チェックシートで確認し合い、個々の成長にそった離乳食の進め方を判断基準にしているというケースや、マニュアルの「食べる時の姿勢」を参考に、適切な背もたれや足乗せ台を準備し、

食環境を整備したというケースもあった。

移行期の見極めの一例としては、9～11ヶ月頃（歯ぐきでつぶせる固さ）から12～18ヶ月頃（歯ぐきでかめる固さ）への移行には、両方の形態を提供し、子どもの食べ具合や噛み方、嚥下の仕方を保育士と調理員が確認し合い進めているという報告もあった。

また、手指機能の発達を促す手づかみ食べの時期には、つまみながら遊ぶような玩具を準備するなどの事例もあった。

③ 保護者への支援

「離乳食の進め方に不安がある」「進め方が分からない」など、訴える保護者も多く家庭での進め方を聞き取ると、離乳の進行為が極端に遅い、月齢に合わない食品を食べさせている、咀嚼機能の発達にあった調理形態ではない事例が多く挙げた。

このような保護者に対して、適切な情報を伝えるツールとして「離乳食マニュアル」を活用し、離乳食だよりや連絡帳、クラス便りなどをおして、離乳食の進め方や食材の大きさ、形態などを伝えているという回答もあった。

また、園独自に作成した手作りの「離乳食アルバム」と「離乳食マニュアル」を、保護者がいつでも閲覧でき確認できるように、常設している園もあった。さらに、保護者が関心を示したページは、十分に説明し印刷して資料として手渡し配布しているというケースや、離乳食のスタート時は一週間程度母親に保育所での離乳食の時間に同席してもらい、味やかたさなどを知ってもらうという回答もみられた。

(3) 考察

職員の協働性と資質向上がすでにみられる保育所と、これからの発展が望まれる保育所がみられ、保育所間に協働性や資質向上にむけた職員間の意識に大きな差があった。

そこで、職員の協働性と資質向上につながるアンケート結果や各保育所での取り組みを、次回の研修会で活用することにした。

3) 事例（職員の協働性）研究

(1) 方法

各保育所で「離乳食マニュアル」を活用した取り組み方と、各保育所の振り返りの判定基準を共有することをねらいとし、第1回研修会を行った。研修会で行われたグループ討議の内容と全体の発表内容から、参加者同士の発見や学びがみられた事例を挙げ考察を加えた。

(2) 結果

【事例1】：グループAの討議内容より抜粋

K保育所では、家庭で食べている食材の確認を保護者にしてもらうため、離乳食献立表と食品確認表（給食食材のリスト）を渡し、チェックしてもらっている。

それを受けてグループ内から、食品確認表は見にくいので、離乳食で使用する食材と分量が記載されている調理師用献立表を用いてはどうかとの提案があった。また、保育所で初めて提供する食材の日は、調理師用献立表を配布し、保育室の壁に食材ごとに色分けした調理師用献立表の掲示をしてはどうかなど、保護者にむけた支援のあり方に対する新しい方法の提案がなされた。

【事例2】：グループEの討議内容より抜粋

L保育所の1歳児クラスの担任は、「離乳食マニュアル」を職員間で参考に見る程度であった。しかし、「離乳食マニュアル」を1歳児の月齢の低い子どもにも活用しているという意見を聞き、マニュアルを参考にして、スプーンの使い方や姿勢、食べさせ方などを職員間で確認し合い、保護者に伝える必要性を感じたとの意見があった。

【事例3】:グループⅠの討議内容より抜粋

M保育所の担任保育士より、子どもへの適切な食事量が保護者の考えと異なるという意見がでた。グループ内から、家庭との連携のために保育所での離乳食の写真を掲示して、適切な食事量を知らせる、保護者に保育所での食事の様子を見てもらう、など支援に活かす方法が提案された。

(3) 考察

研修を通して、「離乳食マニュアル」を活用していない保育所や活用している保育所において、活用の方法は様々であった。事例に示したように他の保育所からの参加者と意見交換をすることで、グループ内で新たな支援の方法を見出し共有することができた。また、保護者への支援方法について活発な意見交換がみられ、課題となった方法の提案がなされた。

連絡帳や壁新聞などの掲示物を中心に、保護者への情報発信を殆どの保育所が行っていた。しかし、壁新聞などの掲示物に興味のある保護者は足を止めるが、食育に興味がなく、最も支援が必要であろうと思われる保護者には、情報が届かないという問題も把握できた。

全体の課題としては、「離乳食マニュアル」の活用が担当や個人の保育士に限られ、保育所全体での情報共有や活用は不十分であった。また、最も支援を必要とする食育に興味のない保護者には、どのように情報を発信すればいいのかなど、職員の協働性に関する共通の課題も把握できた。

4) 事例（職員の資質向上）研究

(1) 方法

平成25年10月29日に第2回研修会を行った。第1回研修会で把握した課題に対する取り組み事例の紹介と、講師による「子どもの発達と離乳食の進め方」に対する講義を受け、その後グループにわかれ検討を加えた。事後アンケートをもとに参加者の意識変化について考察した。

(2) 事例

① 「離乳食マニュアル」活用事例

【事例4】：食育新聞

「離乳食マニュアル」を参考にし、自らの保育所の食育新聞（図4 食育新聞）を作成、掲示した。

壁新聞に興味のない保護者も、自分の子どもの写真があれば足を止めて見ると考え、園児が食べている口元や手元の写真を掲示し、わかりやすく離乳食の進め方について解説を加えた。一層分かりやすく伝えるため、文字の大きさや色などにも工夫した。

いつもは慌ただしく送迎していた保護者も足を止め、我が子が食べている様子の写真を嬉しそうに見ていた。



図4 食育新聞

【事例5】：食育通信

図5に食育通信を示した。

幼児食の取り分けと離乳食の進め方を、月齢ごとに写真とレシピ、コメントを載せて、食育通信を作成し保護者に説明した。

保護者に「大変な離乳食」と思いせるのではなく、「楽しめる離乳食」として伝えることをねらいとし情報を発信した。

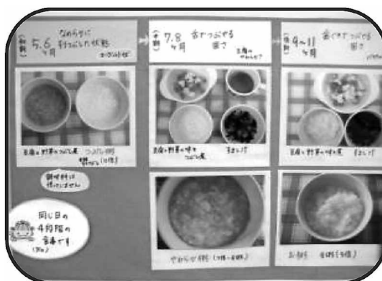


図5 食育通信

掲示した写真は園独自に作成した手作りの「離乳食アルバム」におさめ、いつでも保護者が見られるように常設した。

【事例6】：手作りの表彰状

離乳食が完了した子どもと保護者に手作りの表彰状を贈っている。

仕事をしながら離乳食を作ってきた保護者の頑張りに共感し、保護者の気持ちに寄り添って、保育者側の思いを伝える支援とした。図6に表彰状を示した。

～離乳食卒業おめでとう～

「ここに完了食になったことをお祝いするとともに、今まで仕事をしながら離乳食を作ってくれたお母さんの頑張りを褒めたたえたいと思います。」（表彰状より抜粋）

表彰状を渡された保護者は、「周囲からはしっかりしなさいと言われることが多く、褒められることは久しぶりでうれしい」など、喜びの声が多く聞かれた。

② 参加した保育者の意識変化

「離乳食マニュアル」の活用は、職員全体で取り組む媒体となり、その活動を通して協働性とは何かを理解し始めるきっかけになった。

事例でも示したように、保育所独自が「保育者のチェックシート」を作成する、保育所の特色を活かした食育通信を発信する、保護者の興味をひくように工夫した壁新聞を作成する、など保育者の意識変化が行動の変容へと繋がった。



図6 表彰状

(3) 考察

研修会をとおして参加者の意識と行動に変化がみられた。事後に行った自由記述のアンケート結果の中にも、各保育所での対応方法を知り、自らの保育所での課題について取り組む意識が芽生えたとの記述も多かった。特に、離乳食作りを難しいと感じ食育に興味がないなど、最も支援を必要とする保護者に対する気づきがみられた。

今後も継続的に研修を開催するなど、職員の資質向上に向けた取り組みを追跡調査するなどしてその重要性を把握し、行政が中心となって食育推進に関する企画や運営、発信を行う必要性を痛感した。

5) 事例（保護者支援）研究

(1) 方法

第3回研修会は前2回の研修を踏まえ、「離乳食マニュアル」の活用について事例の紹介とグループ討議を行った。また、講師による指導や講評を受け、今後の食育の進め方について検討し合った。

得られた結果から、本研究の目的である職員の協働性や資質向上はどのように図られるのか、保護者支援へどのようにつなげるのかを考察した。

(2) 結果

保護者への支援となった事例を以下に挙げる。

【事例7】：個人への食だより作成

N保育所では、0歳児クラスで使用している離乳食の食材などを掲示したが、保護者の反応は今一つであった。そこで、個人への食だより（図7）を作成し、保育所で離乳食を食べている姿や成長の様子を、写真とともに掲載した。

食だよりとともに、保護者にむけた意見や感想の用紙を添付し、家庭に手渡し発信した。すぐに多数の保護者から反応があった。その内容は図8

に示した。

食育だよりを媒体として、離乳食の進め方などについて話すきっかけとなった事例である。園と家庭との連携に結びついた保護者支援のひとつのケースである。

【事例 8】：幼児食と離乳食の展示

〇保育所では、離乳食を作ること
に負担を感じて、レトルトに頼って
いる保護者が多かった。

ある保護者から「離乳食のためにブロッコリー1個買ったら無駄になる」という訴えがあった。離乳食のために食材を用意することが、非常に負担に感じていた。

そこで、離乳食は大人の食事で使用した食材をもとに作ることができ、取り分け食であることを口頭で伝えた。しかし意識や行動の変化はみられなかった。

次に、保護者向けの展示食に着目し、これまでは幼児食だけの展示であったが、離乳食も併せて展示することにした。幼児食の食材から取り分け、離乳食が作れることを視覚的に伝えることをねらいとした。

図9に幼児食と離乳食の展示を示

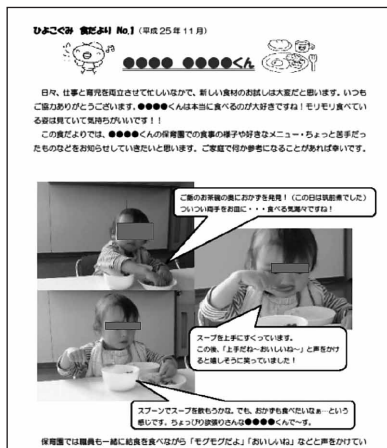


図7 個人への食だより

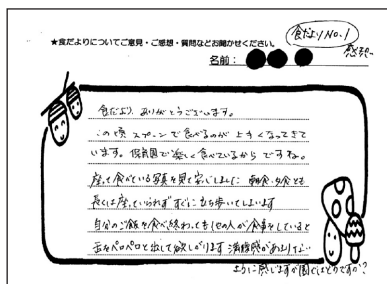


図8 保護者からの反応



図9 幼児食と離乳食の展示

した。その結果、保護者に負担感が薄らぐなど意識の変化がみられ、離乳食を家庭でも作るようになった。

(3) グループ討議の結果

前2回の研修を通し、職員間で「離乳食マニュアル」を参考に、イスとテーブルの高さを再確認し、チェックシートによる子どもの発達を確認し合ったという保育所が多くなった。

また、チェックシートを個人用として活用するために内容を整備し、一人一人の子どもの発達を、職員間でより把握しやすくなったという報告もあった。さらに、食材の大きさや刻み方の確認を行い、担任同志だけでなく調理員との連携が密になり、共通理解を持って離乳食を進めるという体制が確立した保育所もあった。しかし、職員間での捉え方に差や違いがあり、保育所全体での共通理解には至らない保育所もあった。

職員間の話し合いや連携を通し、他職員と共通理解を図り、園全体の統一見解をもって、保護者へ発信していくことの難しさが挙げられた。

「離乳食マニュアル」を、保護者支援に活用した保育所もあった。離乳食を進めていく過程で、口頭では伝えきれない内容については、マニュアルの写真を見せることで、子どもの発達の確認や食材の大きさの目安などが、分かりやすく伝えられたという報告もあった。

しかし一方では、完了食に早く移行したい保護者と折り合いが難しく、保護者と話をする時間の確保が困難など、十分に伝えられていないという現状もある。保護者への効果的な伝え方については、今後の課題として検討を続けていく必要がある。

(4) 考察

前2回の研修会をとおして、職員の意識変化が事例発表にみられるような行動変容に繋がった保育所があった。また、「離乳食マニュアル」の活用について、チェックシートや写真を利用することで、子どもの発達や移行期への目安を、職員間で確認することができた保育所が多かった。研修を

通して他園の取り組みを知り、自らの保育所での取り組みに活かしたケースも多くみられた。

しかし、課題も残った。1つ目は、職員間での共通理解が不十分で、保育所全体で取り組めていない保育所があった。今回の研修に参加した食育担当者が核となり、まずは自園での家庭のニーズを把握し、食育を推進していくことが求められる。他園での事例から自園でできることを探りつつ、子どもの発達にそった支援や地域の特徴を捉えた食育の推進が望まれる。

2つ目は、保護者へうまく発信出来ていない保育所があった。他の保育所の取り組みを参考にし、保護者への発信方法を検討していくこと、実施後はアンケート等により十分な発信ができているか評価する必要がある。振り返りから得られる取り組み結果を基に、園全体でその内容を検討する必要がある。

3回の研修をとおして、参加者の意識変化や行動の変容がみられた。これらの結果をとおして、職員間の協働性や資質は全体的に上がったものと考えられる。しかし今後の課題としては、各保育所において、さらなる協働性や資質の向上をはかりながら、保護者への効果的な支援方法などを継続的に探っていくことが求められる。

食育は決して早急に結果が得られるものではない。子どもの発達の連続性と食育の継続性を常に念頭に置き、弛まぬ努力を続け取り組んでいく必要がある。

4. まとめ

調査研究では、「離乳食マニュアル」の活用をとおして、既に職員の協働性や資質が向上した保育所から、まだ十分に活用しきれていない保育所まで状況に大きな差があることが把握できた。

その結果を基にした事例研究1では、グループ討議を通して参加者同士が意見交換をすることで、課題や参加者間での気づきが把握できた。

ここで得られた課題とは、職員の協働性と食育に興味がなく、情報を発

信しても無関心な保護者への支援内容である。職員の協働性については、グループ討議をとおして改善点が把握できた保育所もあった。保護者への支援については、どの保育所も最も支援の必要性がある保護者に対する対応が困難な状況を抱えていた。

こういった課題や問題を踏まえたうえで行った事例研究2では、既に課題に対する取り組みが行われている事例を紹介し、講師からのアドバイスを受けたことで、参加者の意識が変化した。

事例研究3では、2回の研修会を通して実際に行動の変容があった保育所の事例を紹介し、グループ討議を行った。職員の協働性の向上や保護者支援の工夫を報告し合い、職員の資質向上がみられた保育所もあった。職員が協働して子どもや保護者へ支援することは、職員の資質向上につながるという事例が挙げられた。一方で現実的な問題として、職員の協働性を高めていくことが課題とされる保育所や、多忙な保護者への支援の内容が課題との報告もあった。

研修会をとおして、参加者同士の意見交換により意識の変化がみられ、その結果、行動の変容として保育所職員の協働性や資質の向上、保護者への支援体制の改善などがみられた。また、職員の協働性と資質の向上が相乗効果として表れた事例も多くあった。

今後は、意識の変化があった保育所がどのような行動の変容を辿るのか、行動変容があった保育所がどのように食育の継続を図り、さらなる発展につなげていくかなどの追跡調査を行い、食育を通した職員の協働性や保育者の質の向上に向けた取り組み、さらには保護者への支援のあり方を探っていきたい。

引用文献

- 1) 内閣府：食育基本法、(2005)
- 2) さいたま市保健福祉局保健部健康増進課：第2次さいたま市食育推進計画、(2013)
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針、(2008)
- 4) さいたま市保育課：離乳食マニュアル改訂版 (2012)
- 5) 厚生労働省：授乳・離乳の支援ガイド、(1995)